

# 小学生・作文 国土交通省事務次官賞

## 「大雨の被害から感じたこと」

愛南町立緑小学校 6年 <sup>きゅうとく</sup>久徳 <sup>こうた</sup>航大

夏休み前にあのものすごく大規模な大雨が西日本を襲いました。特にぼくたちの住んでいる愛南町や広島県、岡山県が大きな被害を受け、多くの死者も出ました。これまで、台風や地震での被害はいろいろありましたが、大雨による被害はあまり聞いたことがありませんでした。

この大雨で土砂災害が起こり、その影響でミカン畑のミカンがだめになってしまった農家の人たちがたくさんいます。ぼくのおじいちゃん、おばあちゃんもミカンをつくっているの、ニュースを見て、

「こりゃあ、ミカン畑を作り直すのは大変やなあ、おおごとや。」

と言っていました。ぼくが、

「木を植え直したらええんやないん。」

と言うと、

「そんな簡単なことやない。畑も作り直さんといけんし、木を植えたからといってすぐに売れるようなミカンになるわけやない。ミカン作りも大変なんぞ。」続けて、

「ミカンは、木を植えて、春夏秋冬肥料をまき、雑草取りをくり返す。葉や花芽が出ると虫に食べられないように消毒をしてまた肥料をまく。それを五年くり返すとやっと実ができるようになるんぞ。これから、あの人たちは本当に大変じゃ。」

と言われました。

そんなに気の遠くなるような年月がかかるのに、ミカン農家の人たちは、一生けん命に復旧作業をしていました。山の斜面に立ち、この暑さの中での作業はとても苦しそうでした。でも、このミカン畑を復旧させなければ仕事もなく、収入もなくなるので、みんな真剣でした。それにインタビューされている人の話を聞くと、

「代々おじいちゃんたちから受け継いできたミカン畑だから、ここでつぶすわけにはいかない。」

「吉田のミカンは、全国でもおいしいと有名で、待っている人たちもたくさんいるからがんばらんといけん。」

と、とても明るく話しているのが印象的でした。なんだかぼくまで元気をもらいました。

もう一つ、ニュースでぼくがショックを受けたことは、ぼくたちと同じ小学生二人とそのお母さんが、土砂の下じきになって亡くなったことです。これからたくさん楽しいことが待っていたのに、あっという間に命を奪ってしまう土砂災害は恐ろしいなあと思いました。

ぼくの家も山のがけの下に建っています。近所に家もなく、もしもの時にはどうしようといつも心配になります。助けを求めようとしても、下の道路は山からの大水が川のように流れ、みぞからは水があふれていてとても難しいです。だから、うちでは早めの避難を心がけています。また、山水があふれないように、家の間にパイプを通したり、みぞを作ったりして流す工夫をしています。避難する時のために非常持ち出し袋も用意しています。アウトドアが好きな父さんが、アルミ缶で火をともしたり、お湯をわかしたりするミニコンロのような道具を作って入れています。米も一合ずつナイロン袋に入れてそのままたけるようにしています。この間緑小学校は、地区合同の避難訓練をした時、親子でこのナイロン袋でご飯をたく方法で昼ご飯を作りました。親も初めてのことで、限られたペットボトルの水を利用してグループで考えながら協力して行いました。おかゆっぽいものやカチコチのものもあったけど、みんなで分け合って食べました。もしもの時には、もっといろいろな問題があるんだろうなと、体験して改めて思いました。そのために、これからはもしっかりと避難訓練をしていきたいです。そして、自分の命も家族の命も友達の命もだれ一人とし失うことのないよう防災について学んでいきたいです。